

## 『現代思想を読む事典』を読みとおす

橋爪大三郎

辞書類の執筆・編集くらい労多くして、報われるところの少ない仕事もないだろう。辞書類の書評も、それと似たところがあつて、正直言うと荷が重い。が、同病相憐れんでもいられないので、ここは気をとり直し、しっかりと리카かりましょう。

今村仁司さんがこんど編集した『現代思想を読む事典』(講談社現代新書、分厚い割に値段も安く、評判もよいようです)。

買おうかよそうかまだ迷っている人たちのため、いちおう概略をのべておくと、執筆したのは編者の今村さんをはじめ、五十名。大/中/小/人名、の五百五十あまりの項目のそれぞれが、《書き手たちが思想の言葉のひとつひとつと取り組み記述するなかで、各人の思想の言葉を吐露していく》、編者のいわゆる「主観的記述法」による、《独立の小論文の形式になっている》。それは、《荒削りの言葉、それも現代との緊迫した対決のなかで産み出された言葉こそが、思想の生命というべきである》との、今村さんの信念に基づく

ものだ。この構想を実現すべく、執筆陣も各分野の中堅の、生きのいいのが揃つてゐる。項目ごとに参考文献があげてあり、索引や参照の指示も丁寧で、まずは使いやすい部類に入るだろう。

さて、八百頁もあるこの事典を、片っ端から批評していったら日が暮れてしまう。それに相手は、一枚岩の思想的構築物とはちがうから、だんびらを振り回しても空を斬るかたちになる。そこで、書評としてはやや変則的ながら、現代思想に必ずしも明らかな私の友人たちにも手伝ってもらうことにした。そして、めいめいの日頃の疑問がこの事典でどう解決したかを報告してもらつて、皆さんの参考にしていただくとしよう。

\*  
☆〔在学中から山のような書を読み、経済学部を卒業後は証券マンとなつて、イスラーム研究に首をつっこんだりニューヨーク勤務になったり活躍中のおつおさんの場合〕「イスラーム」「イスラーム原理運動」「イラン

革命」「オリエンタリズム」の項は手堅いですね。執筆者の黒田壽郎さんを知ってるけど、身量<sup>みびき</sup>で言うわけじゃないですよ。というわけで満足。あと、欲を言えば、経済の扱いが全般に地味なのは、思想事典という性格上、仕方がないのかな。それにしても「貨幣」「市場」「失業」「資本主義」などの項目をみるにつけ、どうも近代経済学の比重が小さすぎるように思う。それに八〇年代に再登場して以来、一世を風靡<sup>ふうび</sup>した「保守主義」が、全然触れられていないのは不思議だ。レーガン、サッチャーならずとも、重要な現代思想の「潮流」と言えると思うのだが。人名項目で「ハイエク」はあがつていますけどね。そういえば、ゴルバチョフ以降のソビエトの動向や、ポーランドの自主管理労組、中国現代化についても記述が見当たらないみたい。マルクス主義が変容していくことは、現代の不可避な問題と思われれるのに、その辺に心が払われていないとしたら、ちょっと残念です。

☆〔最近〇しを辞めてインテリアの仕事始めたが、やっぱりコンセプトが大切だと気づき、たとえばミニマル・アートや環境音楽なんかが生活空間の変容にどう関係しているか知りたくなったゆきえさんの場合〕「環境音楽」や「ミニマル・アート」はもちろん、「環境」や「インテリア」も載つてない。ピーしょーかと思つた矢先に「コンセプチュアル・アート」の項目を見つけてやれ安心。なにになに《美術は視覚的イリュージョンをその拠り所としてきたが、そうした従来の表現形式や作品のありかたそのものを……考え直すことに力点を置いた……》。重

要なのは作品そのものではなく、むしろそのプロセスとして示される「コンセプト」の方であり……」。ふむふむ。関連項目に「ダダ」「デュシャン」「ポップ・アート」「オブ・アート」「キネティック・アート」もあつて、納得。だけど、大学で習ったことのおさらいだな、うん。ま、いいか。音楽じゃあ「サティ」の項に「家具の音楽」が出てるし、「ケージ」もあるけど、いまどき「サウンドスケープ」の項目だつて、あつていいと思う。要するにインテリアには、現代的な思想性なんかまだあるわけない、って思われてるのかな、きつと。

(おふたりとも、ごもつともです。でも欲張りというか、みなさんご自分の関心のあるところだけ、どうしても目がいくようです。)

☆〔郷里の大学でドイツ語を教えるかたわら、本職よりもずっと熱心に詩と称するものなどを書いていくおさんの場合〕「ぼくなんかです、だいたい現代思想なんてものに興味ない。誰かがどこかで最新の「現代思想」を仕入れてきて、小出しに売り出すんざ怪しげな商売ですよ。そういう「啓蒙」は、知的な位階秩序の祭壇にひざまずく「僧侶」の内職なんだ。ために「ベンヤミン」のところなんか、見てごらん。ほら、ねっ……」。《ベンヤミンの思考の根底をなしているのは、マルクス主義、とりわけベンヤミン独自の視座へと読み換えられた「唯物論」と、ヨーロッパの神話的・神秘的伝統に由来する「メシアニズム」の有機的結合である》。あれー、うまく書いてあるなあ。じゃあ、「アドルノ」はどうだ? 「ヘーゲルの思想」

は？ 《思想家としてのヘーゲルの腕のみせどころは……対立項のそれぞれがいれば全力を挙げて自己主張しつつ争い……どのようにして互いに納得できるような点を求めるか、を具体的に記述することにあった。》うーむ、これも悪くないっ。じゃあじゃあ、「ウィトゲンシュタイン」は？ 「カフカ」は？ 「トーマス・マン」は？ あれれ、やっぱり充実しているなあ。立場ないなあ。……ということではすねえ、そのおつまり、あれです、日本の知的大衆は幸せである、と。多くの立派で高級な詩のほかに、手軽にこんなものだって、読もうと思えばすぐ読めるんだから。

(啓蒙にみせかけた本質的な仕事がありうると、私も思います。)

☆「障害をもった労働者としての日常から、身体や差別のあり方を考え、最近では臓器移植や脳死の問題が気になっているしげおさんの場合」まず「身体」「生命科学」「遺伝子工学」なんかをざっと見たんですわ。あとは、「生命倫理」の項目がないんで、索引からバイオエシックスのところをたどって読みました。《生/死の境界で身体を問うバイオエシックスの問題……。個体死と生理学的死とをどのように関係づけるかという問題を解決するためには……身体のもつとも基本的な問題に遡らざるをえない》《技術的应用がバイオエシックスの隆盛を必要とする深刻な問題の発生源になっていることなど、根底的に問われねばならぬことも多い》。そりゃそうやろけど、もつとその先を言うてくれな、なあ。「脳死」「移植」「障害」は項目なし。「人種差別」の項目はあったけど、「差別」がないから「差別化」の

いし、「狼狽」や「ボルノ」も無視されてる。問題やテーマではなく、学説に従って項目が並んでいるっていう感じ。それにしても、女性の執筆者五人というのは、ちょっと少なくない？ ついでに、卒論のテーマだった「シユルレアリスム」の項目も見ただけど、こっちは満足。この程度の分量の事典にしちゃ、よくまとまってると思うよ。

(家庭にあって家庭を究めつくす現代思想を生み出すのは、あなたかもしれない。)

そのほかにあと何通も、報告が到着中であるが、私の一存で、誌面に適切と思われるものを選び出した。

最後に私自身の批評というか、感想ものべておこう。

日本人にまだ、思想は似合わない。残念ながら。そんな気がして仕方ない。思想と人生とは一体のものなのに、そんなふう生きてる日本人のなんと少ないことか。知識をこととする人びとに特有の幼さ。脆さ。傲岸さ。軽薄さ。そういうものつきあっている。と、われわれのあいだには、思想を生みだすはずの文明的な基盤が決定的に欠けているのではないかと、情けなくなってきた。

思想が知識として求められ、人生と関係ない架空の殿堂で、権威として通用した時代は終わった。知識は生産過剰で、ありふれている。思想の課題が焦点を結ぶと見えなくなり、世界は意味づけや評価のむずかしい出来事の羅列に変容してしまった。だが、ほんとうの思想の営みが始まるとしたら、ここからではないのか。

ころをみたら、ただの違いのことやった。差別なんか現代思想の問題でないのかしらん。それにしても、「死」の項目もないのや。探し方が下手なんやろか。「老い」は出とったけど。こんな具合で、事典みたいなものに頼らんと、自分で考えなあかん、いうことやと思います。それそうと、吉本隆明さんがなんで現代思想でないんやろ。載せといたってほしい。日本人は誰も項目に入れてないのかしらんけど、そんなんおかしいわ。

(項目がないのは、そこに思想的課題があるという証拠ではないでしょうか。)

☆「マンション住いの専業主婦をやっているあいだに、世間にすっかり遅れをとったと焦りが出て、赤ん坊の手が離れるや否や、早速本屋に入りびたり、フェミニズムの最新動向を追っかけているまさこさんの場合」まっ先に「フェミニズム」のところを開いたら、江原由美子さんが三頁も書いてて、思わず感激。ずいぶん偉くなったんだなあ。《女性問題とは女性の意識の遅れによる問題ではなく男性中心の社会的な女性差別構造の問題である》っていうのは、その通り。わたしの意識が「遅れてる」わけないもの。(だけど夫にべたばれのわたしと、男性中心社会を告発する怒りのわたしの関係は、どうなってるんだろ？) そこで機嫌よく、よその項目もみていった。「家族」では、河合雅雄説を援用して、母系社会から父系社会への移行が人類家族の起源だみたいのべてあるけど、ほんとかなあ。「ジェンダー」「エロチシズム」の項目では「性」「性愛」の扱いが私の趣味じゃな

『現代思想を読む事典』は、こうした同時代に対する健全なひとつのリアクションである。「読む事典」なのは、誰がどう考えているかという個別の表明としてしか、項目が成立しなくなったことを意味する。個人編集もそのための戦略である。この事典を手にするこどで、後の時代の人びとは、八〇年代がどのように締めくくられていったかを知ることになるはずだ。

専門外の項目の出来ばえを判断するのは控えるべきだろう。しかし、たとえば人類学では、清水昭俊、杉島敬志といった、日頃私の信頼する方々が登場していて、嬉しかった。制約の多いなかで、執筆陣がよくやっているのはたしかだ。

そのうえで、あえて言おう。ここにはまだ、われわれの時代を支えるだけの思想がない。日本人の仕事の扱いにも関連することだが、やはり全体の視線は外に向いており、知識が知識として語られているそぶりがある。ここに書かれていることが、「現代」に関わる「思想」のすべて、ということでは果していいのか。そういう心寒さがよぎる。

いまこれ以上の事典を誰かが作れる、と言いたいのではない。新しい思想事典が成功するには、それに先立って、新しい思想が成功しないとだめなのだ。そしてそれは、われわれ誰かが担ってもよい。読者にはからずも、そういう課題まで配達してしまうというのが、この事典の最大のメリットではなからうか。

(はしづめ・だいさぶろう 無所属・社会学)